

## 新規参入者のネットワーク構造

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	原, 珠里
巻/号	104号
掲載ページ	p. 17-24
発行年月	1999年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



[論文]

## 新規参入者のネットワーク構造 ——雑誌『百姓天国』投稿者に対する調査結果から——

原（福與） 珠里\*

### Personal Network Structure of Farmers with Non-Farm Background

Juri Hara-Fukuyo

The aim of this study is to grasp the characteristics of personal network structure of farmers with non-farm background. The data collected through questionnaires to contributors of “Hyakusho Tengoku”, a magazine for farmers, show that personal networks of farmers with non-farm background are more widely spread and formed by individual choice in comparison with other farmers. Differences in value consciousness underlying the difference of network structure cause friction between farmers with non-farm background and the community.

[キーワード]

新規参入者 farmer with non-farm background, パーソナル・ネットワーク personal network, 参加型雑誌 magazine with contributions, 価値意識 value consciousness, 地域社会 community

#### 1. 問題と視角

##### (1) 問題の所在

農業外からの新規参入者は、新しい農業の担い手として、あるいは農村地域社会へ活性化をもたらすものとして、関心と期待を集めている。しかし、農村地域社会には多かれ少なかれ固有の規範があり、都市出身者の多い新規参入者が居住するにあたっては、地域社会との間に様々な齟齬やトラブルが生じる事例も少なくない。

このような都市から農村への移住の際の適応の難しさや社会関係の形成に関わる研究は、あまり多くないのが実状である。今後、都市から農村への人口還流がどのような規模で起きるのか、ある

いは起きないのかは不明であるが、移住した場合に生じやすい齟齬やトラブルを実態から探るとともに、その背景を理論づけることも今後重要な研究課題になろう。

新規参入者の適応の難しさを生むものとして、社会関係のあり方は一つの重要な要因である。ここでは都市と農村の社会関係（ネットワーク構造）の実態およびその背後にある価値意識の違いが問題を生んでいる側面に注目したい。本稿では新規参入者の意見交換の拠点の一つとなっている雑誌『百姓天国』への投稿者を対象に行った調査結果から、新規参入者のパーソナル・ネットワークの実態を検討すると同時に、その背後にある価値意識について考察する<sup>1)</sup>。

\*北海道農業試験場

## (2) 調査対象の位置づけ

『百姓天国』は、「百姓による百姓の雑誌」として1990年に創刊された、投稿を主とした参加型の雑誌である。農業を基点として「今の世の中を変えよう」という点でつながった新規参入者たちが雑誌創刊の中心となった。希望者は誰でも編集にたずさわることができ、投稿されたものは原則的に掲載する編集方針により多様な意見交流の場となっている。したがって『百姓天国』の投稿者は、新規参入者に限られない。新規参入者が核となり、その価値観に共感する人々を引き入れたという構造をもつ。このような多様な投稿者の全体を特徴づけるとすれば、農業者・非農業者、新規参入者・継承者を問わず、自分の考えを表現することや、新しいネットワーク形成に積極的な、いわば「農業ネットワーカー」ということができよう。

したがって、調査対象者は「平均的な農業者」ではないし、「平均的な新規参入者」であるともいえない。彼らを調査対象とすることにより、このようないわば新しいタイプの農業者のあり方を探るとともに、彼らの中でも新規参入者とそれ以外の農業継承者を画する違いを明らかにして、新規参入者の直面する問題を解く手がかりとしたい。

## (3) 視角

日常生活の中で個人をとりまくパーソナル・ネットワークが、年齢や性別などの個人属性とともにその居住地の都市化度によっても規定されることは、かねて実証されてきている。日本国内の研究結果としては、調査対象や方法の違いはあるものの、都市化度が高まるほどネットワークにおける親戚・近所の人の比重が低下すること、都市化度が高まるほど多重送信性が低くなる傾向があること、大都市ほど親族・友人ネットワークが広域化することなどが示されている<sup>2)</sup>。

このような都市化度によるネットワーク構造の違いは、居住地の人口規模からいわば生態学的に説明できる部分もあるが、ネットワーク形成の基底にある個人の価値意識の違いも無視し得ない。

日本とアメリカ合衆国の高齢者の社会的ネットワークについて実証研究を行った藤崎宏子は、両者のネットワーク構造の違いの背後に、価値意識

の違いを読み解いている<sup>3)</sup>。アメリカの高齢者のネットワーク全体に占める家族・親族の重要度の低さ、友人などを含む多様なネットワーク構成は、「自足・自立」「個人主義」「業績主義」の価値意識と結びついており、日本の高齢者の社会的ネットワークに占める家族・親族の比重の大きさ、それ以外の諸関係の乏しさは「甘え・依存」、「集団主義」、「属性主義」の価値意識を示すものとされる。これは、家族・親族関係が生まれたときから組み入れられるいわば「所与」のものであり、個人の志向や考えが反映されにくく、また消滅しにくい関係であるのに対し、友人関係は、個別に「選択」的に形成されるものであり、関係の維持についても意識的な努力を必要とすることなどから説明されている。

これらの日本の特質のうち、集団主義・属性主義については、それが農村部に強く残るという仮定をおくことも見当はずれではあるまい。藤崎の指摘のように、集団主義・属性主義は、ネットワーク形成における個人の「選択の余地」の少なさ（親戚・近所の人の比重の高さ）およびいわば出自のわかりあった狭い地域社会内のネットワークの集積（ネットワークの地理的狭さ）と強く関係するからである。

新規参入者の社会関係の特質として、秋津元輝は「自己を中心としたネットワーク」として展開していることを指摘している<sup>4)</sup>。伝統的地域組織などを通じて半ば与えられた関係ではなく、自分が社会関係のマネジメントを行っている姿にその特徴をみたのである。この指摘は、新規参入者が「農村」においても「都市的」な価値意識に基づいてネットワーク形成を行っていることを示していると考えられよう。

以上のような研究の流れをふまえ、本稿では都市と農村の居住者のネットワーク構造の違いを仮定し、それに影響を与えるものとして都市と農村の価値意識の相違を想定する。そして、調査対象者のうち、都市側に新規参入者、農村側に農業継承者が位置しているという枠組みを仮設することにする（図1）。

この枠組みの中で、本稿ではまず「農業ネットワーカー」としての『百姓天国』投稿者のネットワーク構造を明らかにした上で、対象者のうち農外

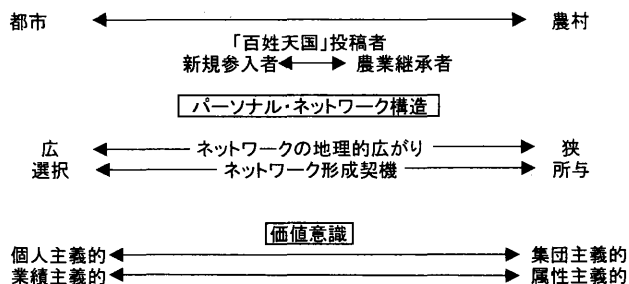


図1 「百姓天国」投稿者のネットワーク構造と価値意識の分析枠組み

からの新規参入者とそれ以外のネットワーク構造の違いを明らかにしたい。すなわち、①新規参入者の方が地域社会（集落内）のネットワークの比重が低く、地理的により広範囲なネットワーク構造をもっている、②新規参入者の方が、自分自身の意思による「選択」に基づいたネットワーク形成を行っている、③新規参入者の方がより異質なネットワークをもっている、の3つの仮説を検証したい。さらにその背後にある価値意識についても検討することを通じて、図1のような構造の解明の一步としたい。

## 2. 調査方法

質問紙調査は、1996年8月に郵送により行った。対象者は、雑誌『百姓天国』の第1集から第10集までの投稿者344名で、内118名から回答があった（回答率34.3%）。

調査票は、『百姓天国』との関わり、それ以外の組織加入状況や社会関係、農業従事実態と社会的属性など全21問からなる。また、『百姓天国』によって得たこと、農業に関わったきっかけ、農業に対する考え、および地域社会に対する考えについては、自由に記述してもらった。

## 3. 回答者の属性

回答者118人の社会的属性を概観する。まず、その居住地は北海道から沖縄まで全国に広がっている。性別では、男性81人（69%）、女性37人（31%）で、年代別にみると20歳代7人、30歳代28人、

40歳代37人、50歳代20人、60歳代12人、70歳以上12人である（不明2人）。

農業従事状況は、「主な仕事として」57人（48%）、「他の仕事のかたわら」20人（17%）、「趣味程度」5人（4%）で、農業をしていない回答者が36人（31%）を占める（不明を含む）。主な作目は野菜等が多いが、水稻、酪農、養鶏、果樹など多岐にわたる。また、年間の農産物総販売額は、販売をしている回答者の中でも数万円から6,000万円以上まで大きな開きがある。

農業に関わった理由は、「親が農業者」と「配偶者の親が農業者」があわせて46人（39%）、「その他」が46人（39%）である（非該当・不明が26人22%）。ここでは前者を「農業継承者」（継承者）、後者を「新規参入者」（参入者）とよぶことにする。

性別・年齢別の「継承者」、「参入者」の構成を確認しておく。まず性別にみると、男性では継承者34人、参入者32人、女性では継承者12人、参入者14人である。女性は継承者のうち「自分の親が農家」、「配偶者の親が農家」が半々であるが、継承者、参入者の比率に男女間の違いはない。一方、年齢別にみても新規参入者の方が年齢が若い構成をとっている。以下の分析における両者の比較においては年齢の要素が関連している点に留意しなければならない<sup>5)</sup>。

## 4. 調査結果

### (1) 雑誌参加によるネットワーク形成

はじめに、『百姓天国』への投稿が、回答者のネットワーク形成の端緒となっている点を押さえて

おきたい。「『百姓天国』に関わりを持ったこと」によって得た最も重要な成果」として、最も回答率が高かったのは「新しい知人を得た」で31人、26.3%である(図2)。7割以上の回答者がネットワークを通じて個人的な知人を得ており、人数は「2~4人」が最も多い。知人の居住地は「遠い県も含み全国的」という回答が最も多く、「県内が主」、「近県が主」と続く。つきあいで得ることとして「農業技術交流」、「広い地域の情報交換」などのほか、新規参入者同士の情緒的支援、非農業者・異質な価値観との遭遇による視野の広がりなどが指摘されている。

(2) 回答者の地域内ネットワーク

それでは、回答者の地域内ネットワークの実態はどうか、3つの側面から検討する。

はじめに、回答者の地域組織への加入状況をたずねた結果が表1である。選択項目を3つに分け、「自分が期待される組織に加入」している場合

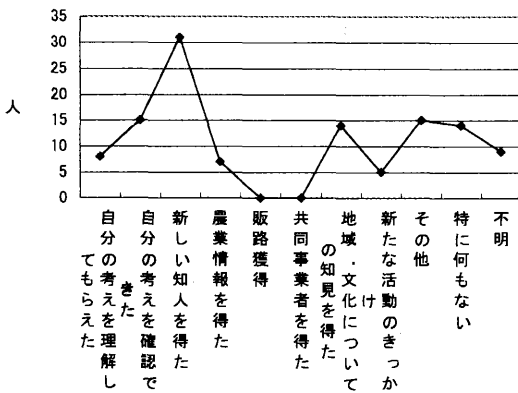


図2 『百姓天国』によって得た最も重要な成果

の組織加入原理を「所与」、自分自身の判断で加入組織を決めている場合の組織加入原理を「選択」、それ以外を「その他」とした。

「自分が期待される組織」という表現がやや曖昧であることは否めないが、農村社会において集落内居住や年齢・性別原理により加入が前提とされているような組織を示すものとして「所与」の組織加入とした。一方、伝統的には加入が前提とされている組織であっても、自分で選択して加入・非加入を決めていると解釈できる項目を「選択」原理によるものとした。

各項目の回答者数をみると、最も回答率が高いのは「自分が期待される組織に加入し、中心的なメンバーとして活動している」であり、「自分が期待される組織に加入しているが、あまり活発な活動はしていない」とあわせると、「所与」の原理による組織加入が全体の42%を占める。一方、「選択」原理による項目の回答者もあわせて全体の33%を占め、自分自身の判断によって加入組織を選択している回答者も少なくない。継承・参入別にみると、継承者では「所与」53%、「選択」38%、「あてはまらない」9%で、参入者では「所与」33%、「選択」20%、「あてはまらない」22%の他、「新来者なので旧来の組織には不参加」が25%となっている。参入者の場合、実に67%が地域社会組織に「所与」のものとしての参加をしていないことが示された。

次に、農業に関わるネットワークとして、生産物の販路についてみる(図3)。販売農家の主な出荷先は、全体的に「宅配便などによる産直」の比率が高い。特に「参入者」では、80%以上を宅配により販売している回答者が5割を超える。一

表1 地域社会の旧来の組織との関わり・人間関係(単一回答)

組織加入原理	選択項目	全体 人(%)	農業継承者 人(%)	新規参入者 人(%)
所与	自分が期待される組織に加入し、中心的なメンバーとして活動している	26(28.9)	13(38.2)	7(19.4)
所与	自分が期待される組織に加入しているが、あまり活発な活動はしていない	12(13.3)	5(14.7)	5(13.9)
選択	自分に必要のないと思われる組織には加入していない	8(8.9)	3(8.8)	2(5.6)
選択	気の合う人とのみつきあいをしている	7(7.8)	2(5.9)	3(8.3)
選択	利用できる組織や機関とは協力関係にある	15(16.7)	8(23.5)	2(5.6)
その他	新住民なので、旧来の組織や人間関係からはずれている	10(11.1)	-	9(25.0)
その他	上記のいずれにもあてはまらない	12(13.3)	3(8.8)	8(22.2)
	合計	90(100.0)	34(100.0)	36(100.0)

注: p<0.005。

方、農協共販は少なく、特に「参入者」では8割以上が「なし」である。このような回答傾向は、農外就業への依存度の高さと強く関係しているが、一方で、販路を独自に開拓していく姿勢、農協という組織と離れたネットワークのあり方を示している。

また、インフォーマルなネットワークとして、「心を打ち明けて話せる友人」の人数をその居住地別にたずねた結果が図4である。回答者の友人は広域に分布しており、「参入者」では特にその傾向が強い。一方、「集落内」の友人数はいずれも少なく、「一人もいない」という回答者が「参入者」で37%、「継承者」で41%を占める。回答者の情緒的な主観において集落内のネットワークが占めるウェイトの低さを示す結果といえよう。

以上、回答者の地域内ネットワークの実態をみたが、その背後にある地域社会に対する考えの例

を自由記入欄から抜粋する。まず、「地域に積極的にとけ込もうと種々努力するが、容易に溝が埋まらない。」(参入者 男 60歳代)というように、その「異質性」に対する認識がある。また、以下の各記述は農村社会および農村社会組織の「集団主義」、「属性主義」への批判ととらえることができよう。「小学校で学んだごくごくあたりまえの民主主義が実現していない。…他者の考えや生き方を尊重し、言論の自由を守るといことがなされていない。」(参入者 男 30歳代)、「ムラの一人一人はみないい人ですが、ムラ社会として考えるとあまりに均質化していて『はずれることをおそれて』いる雰囲気がちよっと息苦しいです。」(参入者 女 30歳代)、「旧来の組織で、自分からいれてもらいたいと思うものはない。…自発性の必要のない、許されない組織だから。」(参入者 男 30歳代)。

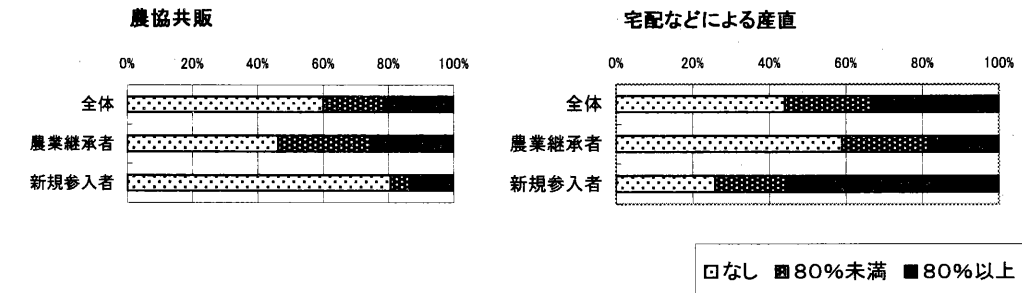


図3 農産物販売ルート別割合

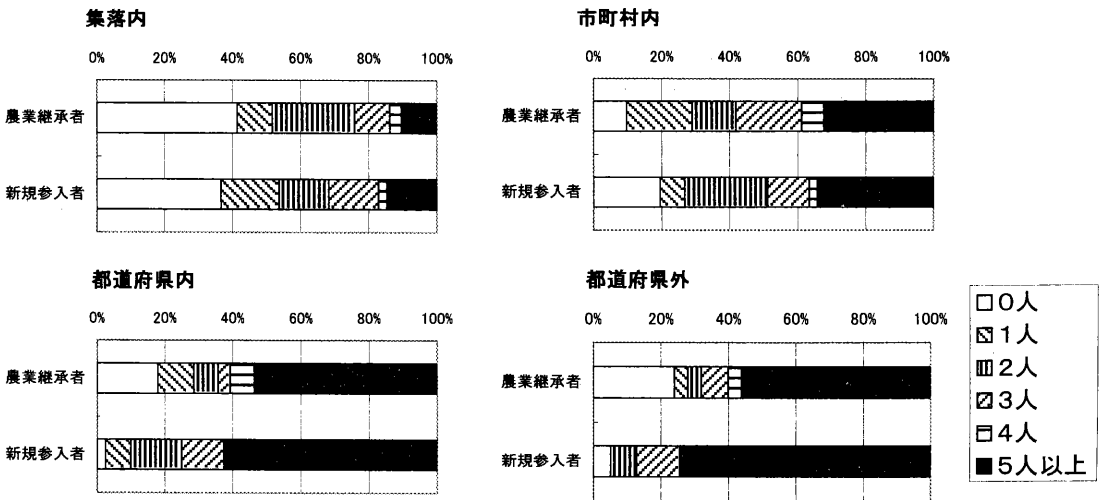


図4 心を打ち明けて話せる友人数 居住地別

表2 農業をする上で重要な知人の職業

		(単位:人)					
		全体		継承者		参入者	
農業(主作物が同じ)		67	29.6%	35	24.8%	32	20.0%
農業(主作物が異なる)		84	37.2%	32	22.7%	52	32.5%
非農業		75	33.2%	37	26.2%	38	23.8%
(内訳)	自営	19		5		14	
	農協職員	4		2		2	
	普及センター・試験場	7		6		1	
	市場・流通関係	2		2		0	
	農業関連会社	2		1		1	
	農業無関連会社	8		4		4	
	役場・公務員	10		6		4	
	内職・パートタイム	4		1		3	
	無職	7		3		4	
	その他	12		7		5	
計		226	100.0%	141	100.0%	160	100.0%

表3 農業をする上で重要な知人の居住範囲

		(単位:人)					
		全体		継承者		参入者	
同集落内		35	14.8%	23	22.1%	9	7.4%
車で15分以内		54	22.9%	16	15.4%	36	29.5%
車で1時間以内		71	30.1%	34	32.7%	34	27.9%
車で2時間以内		21	8.9%	11	10.6%	10	8.2%
それ以外		55	23.3%	20	19.2%	33	27.0%
計		236	100.0%	104	100.0%	122	100.0%

注: p<0.005.

継承者の立場からも現在の地域社会のあり方について不満や批判がある。方向性はやや異なるが、伝統的な社会関係のあり方だけではうまく機能していかない現状を示すものと考えられる。「みんな様々な願いや悩みを持って暮らしている。それを表現できる場がないなあと思う。」(継承者 男 40歳)、「地域の中で孤立している人が多いと思うが、そこからでることは非常に困難を伴う。」(継承者 男 40歳代)。

### (3) 農業をする上で大切な知人

回答者のパーソナル・ネットワークのなかで農業を営む上で重要なネットワークはどのように特徴づけられるのかを明らかにするため、回答者のうち農業従事者に「農業をする上で大切な知人」を5人まであげてもらった。この項目の回答者数

は55人で、挙げられた「大切な知人」は総計236人である。

はじめにこれらの「大切な知人」の職業についてみる(表2)。全体の67%が農業である。専門家や農業に関係のない職業の知人も挙げられているものの、やはり最も重要なのは自分と同じ農業を営む知人であるということがわかる。継承・参入別にみると、同じ農業者といっても、参入者では異なった主作物の知人の比率が高い傾向がみられる。これは、既にみたような新規参入者の農業経営形態や組織加入状況などに関連すると同時に、作物の共通性ではなく、新規参入者同士という共通性に基づくネットワークを重んじていることにもよるのではないと思われる。いずれにせよ、この違いに有意差はなく、「新規参入者の方が異質的なネットワークをもっている」という仮説を裏付けるとはいえない。

次に、これらの大切な知人の居住地についてたずねたところ(表3)、同集落内が14.8%、車で15分以内の居住者をあわせて37.7%を占める一方、車で2時間以上に住む知人が23.3%という結果が示された。継承者・参入者を比較すると、参入者では集落内に住む「大切な知人」は全体の7.4%と低く、「車で2時間以上」の知人が27%を占めるなど、継承者に比べて知人が広範囲に居住している(危険率1%未満)。

回答者との関係は、選択肢の中から複数回答で選択してもらった。結果は表4の通り、全体的にみて親戚や本家・分家関係などをあげた回答は少ない。「近所」という回答は全体で15%である。最も多い回答は「それ以外の友人」であり、いわば個別の契機によって形成された友人である。次いで「同じ団体・クラブに所属」、「仕事上のつきあい」となっている。

回答比率が高い項目は継承者・参入者で異なっている。参入者では「それ以外の友人」が最も高いのに対して、継承者では「仕事上のつきあい」

が最も高い。項目ごとのカイ自乗検定では、「それ以外の友人」(危険率1%水準)、「百姓天国を通じた知人」(5%水準)で参入者が高い回答率を示し、「その他」(5%水準)で継承者が有意に高い回答率を示した。この結果は、参入者の方が継承者よりも個人の「選択」によるネットワーク形成を行っているという仮説を裏付ける。

続いて交流の内容についてみてみたい(表5)。複数回答でたずねた結果、労力の提供(「農作業を頼める」21.0%)、情報提供(「農業技術の情報提供」43.9%)以上に、「農業に関する夢を語

表4 農業をする上で重要な知人との関係(複数回答)

(単位:人)

	全体		継承者		参入者	
近親者	9	4.0%	6	5.8%	3	2.5%
それ以外の親戚	4	1.8%	4	3.8%	0	0.0%
本家・分家関係	1	0.4%	1	1.0%	0	0.0%
近所	34	15.0%	18	17.3%	16	13.1%
同じ団体・クラブに所属	43	19.0%	19	18.3%	24	19.7%
「百姓天国」を通じた知人*	20	8.8%	4	3.8%	16	13.1%
仕事上のつきあい	42	18.6%	25	24.0%	17	13.9%
学友	8	3.5%	6	5.8%	2	1.6%
それ以外の友人**	75	33.2%	24	23.1%	51	41.8%
その他*	34	15.0%	21	20.2%	13	10.7%
回答知人数	226	100.0%	104	100.0%	122	100.0%

注: 1) %は回答知人数に対する比率。

2) \*:p&lt;0.05, \*\*:p&lt;0.005。

表5 農業をする上で重要な知人との交流内容(複数回答)

(単位:人)

	全体		継承者		参入者	
困ったときには農作業を頼める	45	21.0%	21	22.8%	24	19.7%
困ったときには家事や育児を頼める	18	8.4%	9	9.8%	9	7.4%
農業技術について情報を提供してくれる	94	43.9%	41	44.6%	53	43.4%
農作物価格や流通に関する情報を提供してくれる*	52	24.3%	29	31.5%	23	18.9%
農家経営について話し合える	73	34.1%	38	41.3%	35	28.7%
農業に関する夢を語り合える*	99	46.3%	34	37.0%	65	53.3%
地域の習慣や価値観・地域の将来について語り合える	111	51.9%	46	50.0%	65	53.3%
心配ごとの相談にのってくれる	73	34.1%	29	31.5%	44	36.1%
気軽な雑談を楽しめる	117	54.7%	55	59.8%	62	50.8%
計	682	318.7%	302	328.3%	380	311.5%
回答知人数	214	100.0%	92	100.0%	122	100.0%

注: 1) %は回答知人数に対する比率。

2) \*:p&lt;0.05。



り合う」(46.3%)、「地域の将来について語り合う」(51.9%)、「気軽な雑談を楽しめる」(54.7%)などの項目で回答率が高く、精神面・情緒面における刺激や支援が重要視されている。

継承・参入別にみると「価格・流通情報」で継承者、「夢を語り合う」で参入者が高い回答率を示した。これは、農業経営者として相対的に安定した地歩を築いている「継承者」が経営発展のために役立つ情報の提供者を「重要」と位置づけているのに対し、その段階に未だ至らない多くの「参入者」がもっと情緒的なレベルでの共感や励まし合いなどを必要としていると解釈できよう。このことは、農業への新規参入に当たっての支援として技術的な問題だけでなく精神的な問題が重要である可能性を示唆する。

## 5. 考察

以上の調査結果より、「農業ネットワーク」として位置づけた調査対象者について、その地域内ネットワークのウェイトの低さと情緒的支援を特徴とした広域ネットワークの実態が明らかになった。このようなネットワークのあり方は、伝統にしばられないネットワーク形成のあり方として示唆に富むと考える。

また、調査対象者のうち農業継承者と新規参入者の比較において、「①新規参入者の方が地域社会(集落内)のネットワークの比重が低く、地理的により広範囲なネットワーク構造をもっている」、「②新規参入者の方が、自分自身の意思による『選択』に基づいたネットワーク形成を行っている」の二つの仮説はほぼ妥当であることが示された。「③新規参入者の方がより異質なネットワークをもっている」については、これを裏付けるデータは得られなかった。この仮説については「異質」ということの多面的な把握が必要になるのではないと思われる。また、仮説以外では、農業をする上で重要な知人との交流内容として、参入者ではより精神的・情緒的な共感や刺激を重視しているという知見が得られた。

調査対象者の新規参入者は、新しい居住地である農村の社会関係のあり方に、容易に適応しているとはいえない。むしろ批判的な姿勢をもつ場合も少なくない。そのような状況にある新規参入者が農業を行う上で重視している人間関係は自分自身の選択に基づく友人たちであり、農業に関わる精神的な共感や刺激を与えてくれる相手である。このような知人を形成する一つの契機として『百姓天国』への投稿は位置づけられる。この実態および自由記入欄の声は、新規参入者の社会関係についての価値意識が従来の農村社会におけるものとは異なり、より「個人主義的」、「業績主義的」であるという仮説を支持するものであろう。新規参入者と地域社会の間の軋轢が、個々のトラブルの解決だけではすまされない問題を背後に抱えていることを示す結果である。

新規参入者の中には、地域への適応ではなく、地域の変革を望む声も強い。このような新規参入者を地域としてはどう扱うべきかが、今後大きな課題となろう。彼らの地域内ネットワークを充実化する必要性や、その際のネットワークの編成のあり方、またその背後にある価値意識の違いをどのような形で解決し得るか、その方法についての研究も求められる。多様な新規参入者を視野に入れて、地域社会との関係を考察していくことを今後の課題としたい。

## 注

- 1) 『百姓天国』第1集～第13集(富民協会・発売)。調査結果の概要は第13集(1997)に投稿した。
- 2) 都市化とネットワークについては以下を参照。大谷信介、1995年『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク—北米都市理論の日本的解説—』ミネルヴァ書房、松本康編、1995年『増殖するネットワーク』勁草書房。
- 3) 藤崎宏子、1998年『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館、28～35頁。
- 4) 秋津元輝、1998年『農業生活とネットワーク—つきあいの視点から—』御茶の水書房、第6章。
- 5) 以下の分析結果については、年齢階層をコントロールしたクロス集計を行っており、結論については問題ないと考えている。しかし、サンプル数が少ないため、検定することは不可能である。ここでは、年齢のばらつきも含めて二つのグループを比較していると考えたい。